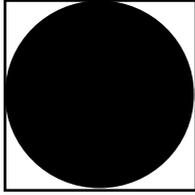


InSEA



公益社団法人 日本美術教育連合 ニュース

No. 140

2014. 3

〒113-0033 東京都文京区本郷2-30-14 文京ビル206号

公益社団法人 日本美術教育連合

発行人 理事長 宮坂元裕

ニュース担当 北川智久

E-mail: kitagawa@elementary-s.tsukuba.ac.jp

7年間で国立大学に現場経験教員10%増員

公益社団法人 日本美術教育連合理事・研究局長 山口喜雄

国立の44教員養成大学・学部（教員養成課程）の2013（平成25）年3月卒業者の就職状況が2014年1月22日付で文部科学省から発表されました。教員就職率上位5大学は、1位兵庫教育83.1%、以下5位まで順に鳴門教育75.5、滋賀72.8、愛知教育72.8、宇都宮71.2と続き、全国教員就職者は正規採用3,729人35%および臨任2,756人26%の計6,485人で卒業生総数の61.3%でした。また、教職大学院25校の2013年3月修了者の就職状況は、現職教員の学生を除く修了者372人、うち臨任を含む教員就職者は346人93%、前年度比0.3%増、4年連続で累計3%の増加です。専攻・専修分野別の詳細はありませんが、教員就職者は増加の途にあります。

眼を転じ、教員養成を行う大学・学部側にも大きな動きがありました。「研究水準、教育成果、産学連携等の客観的データに基づき、各大学の強み・特色・社会的役割（ミッション）」を整理して示す「教員養成分野のミッションの再定義」が求められました。「実践的指導力の育成・強化を図る」ために学校現場で指導経験をもつ大学教員を増やす課題が、重要な柱の一つになりました。その結果、前掲5大学が発表した学校現場経験教員の2014年度現員率と第3期中間目標期間末の2021（平成33）年度での現場経験教員率の目標値は兵庫教育40→50%、鳴門教育28→40%、滋賀20→30%、愛知教育10→20%、宇都宮15→25%で、10%の増加が見込まれます。一方、国策で国立教員養成系は減員傾向にあり、各大学の存続・統合の可否さえも検討中です。

けれども、推定で現在の国立美術教育教員総数約400人の10%は40人、7年後までに退職者補充につき学校現場経験教員約30～40人の美術教育講座への採用が見込まれます。大学教員応募時に必要不可欠なのが著書・論文、その他（雑誌執筆・口頭発表・作品等）の研究業績です。とりわけ、査読付き論文が重要な審査対象です。我が国美術教育界で唯一の公益社団法人日本美術教育連合刊行の『日本美術教育研究論集』掲載論文は査読付き論文で、口頭発表が前提です。他学会のように理論・実践研究論文だけでなく、実践研究報告や研究ノートがあるのが特色です。本年秋季開催予定の日本美術教育研究発表会2014への多数の口頭発表を期待しています。

■ 予 告 ■

公益社団法人日本美術教育連合 第4回 定時総会は平成26年4月20日（日）に開催いたします。会場は、聖心女子大学400番教室（東京都渋谷区広尾4-3-1日比谷線広尾駅が最寄り）です。総会は午後1時30分より行います。年1回の定時総会は公益社団法人の最高議決機関です。ぜひご出席いただけますよう、ご予約のほどよろしくお願いたします。

テーマ 今、工作・工芸教育を考える

—工作・工芸教育におけるデザインの思考と熟達した専門知識の関係—

講演者：佐藤 真帆 先生（千葉大学助教） コメンテーター：茂木 一司 先生（群馬大学教授）

日 時：平成25年11月30日（土）14：00～16：00 会 場：武蔵野美術大学新宿サテライト エルーム

■宮坂元裕理事長挨拶

佐藤真帆先生が『教育美術』（註）に連載された研究は、現代の工作・工芸教育について、イギリスはどのような思考し、日本はどのような傾向を持つかを組み合わせて論じた興味深いものである。日本の学術研究は、最近結果重視になっている。結果に至るプロセスの研究や教育学などの研究は軽く見られる傾向がある。しかし、教育の世界ではプロセスこそ重要である。体を通して考え表現するバランスのとれた人間を育成すること、豊かな人間性を育てる「ものをつくる」という教科性の確立について、今回の講演によってあらためて考えたい。

■佐藤真帆先生講演

田舎で育った私は、小さな頃から周りの大人が日常生活の中で、ものを巧みにつくることを見てきた。そして、巧みなものづくりに対する憧れのようなものをもつようになった。大学で日本画を学び、創造的に考える力と技術の習得の関係について考えるようになった。実際に小中学校で教えるときにも、子どもたちの考える力とものをつくる力をどう育てればよいのか悩んだ。そのような中でイギリスへ留学し、偶然にはあるが、工作・工芸教育を研究するレイチェル・メイソン教授に師事することとなり、美術教育の中でも創造性と技術が一層重要な問題となる工作・工芸教育についての研究を進めることとなった。

メイソンの考える工作・工芸の概念はユニークであった。例えば、イギリスで伝統的に作られてきた牧場の垣根も工芸であると言う。また、現代のクラフトの作品を見ても大きく変化してきている。その一例として、ダミアン・ハーストやグレイソン・ペリーの作品を見てほしい。これらの作品を見ると、現代の工芸の概念の問題を改めて考えさせられてしまう。

研究テーマ「工作・工芸教育におけるデザインの思考と熟達した専門知識の関係」のキーワードについて説明をする。学校で子どもたちが学習カリキュラムや教師の影響を受けながらおこなう工作・工芸のつくる学習活動を「スクールクラフト（School Craft）」として定義した。次に「デザインの思



考 (design thinking)」については、人がものをつくる時に独創的なアイデアを生み出し、発展させていく思考の様式とした。また、「熟達した専門知識 (skilled knowledge)」については、道具や材料を使いこなす力の意味であるが、「知識」の言葉を用いたのは、近年の認知科学や脳科学の研究により、つくることが脳と体の連動という複雑な認知として捉えられているからである。本研究の中心的な課題は「技術の習得に大きなウエイトのある工作・工芸のカリキュラムで、子どもの創造的に考える力を育てることはできるのか、できるとするならばどのようにして可能であるのか」というものである。そして理論的には可能であるが、実践として学校の現場では可能だろうかという問いが続くことになる。

研究の背景としては、工作・工芸教育が材料や道具をうまく使いこなす技術 (熟達した専門知識) の習得中心となっていることが挙げられる。歴史的に工作・工芸が学校教育に導入されたのは、男子の職業訓練、女子の家庭での仕事の訓練という側面があった。また、身体的実践的側面が強調されてきたために、抽象的思考が苦手な子どものための教科という偏見もあった。特にヨーロッパでは頭と手を分離して考えてきた歴史があり、工芸はローアート (low art) として位置付けられてきた。すなわち、工作・工芸・クラフトは社会的問題を含んだ活動であったと言える。一方、1990年代から創造性の育成が重要な教育課題となってきた。イギリスでは、すべての教科において子どもたちの創造性の育成が教育目標となっている。

「熟達した専門知識」と工作・工芸を考えるきっかけとなったのは、ハワード・ガードナーのマルチプルインテリジェンス (multiple intelligences) であった。その中でガードナーはクラフトを「初心者が熟達者から直接的に学ぶとうかたちで習得され、ものづくりやその他の行為によって表現される特徴的な熟達した専門知識」と説明している。そして、その熟達した専門的知識は誰もが持つ身体的知性 (bodily-kinesthetic intelligence) であるとしている。イギリスのクラフト教育についてのナショナルサーベイを行ったニコラス・ホウトンは、クラフトを限りなく言葉で表現できない特徴的な暗黙知であり、行為そのものを通して表現されるものであると説明している。具体的に「熟達した専門知識」とはどのようなものなのであろうか? 自転車に乗れることも熟達した専門知識の一つである。一度自転車に乗れると忘れることはないし、無意識にできる。工芸家が一定以上の質のものを生産できることと同じである。1990年代の調査では、イギリスにおいてクラフトの教育は衰退しており、その理由として、授業時間の不足、指導できる教員の不足、道具や材料などをそろえる資金の不足などをあげられている。また、多く教師がクラフトに対して時代錯誤的なイメージを持っているという点も指摘された。しかしながら、これらの先行研究の中で、教師たちは子どもたちがものをつくることは大切であると考えており、子どもたちもそれを楽しんでいる状況も報告されていた。

次に創造性とデザインの思考について述べる。歴史的に工作・工芸と創造性は、しばしば議論の対象となってきた。工作・工芸が創造的でないと批判される理由のひとつは、特別な技法を習得することが必須であり、反復練習や熟達者のまね等が特徴的な学習であることである。本研究では創造的思考ではなくて、デザインの思考としている。これは、創造的思考は必ずしもものをつくることなくても成立するが、ここではものをつくることについて考えることからデザインの思考という理論を使うことにした。この調査では、先行研究からデザインの思考を人がものをつくるために独創的なアイ

デアを生み出し、発展させていく思考のモードと定義して調査を始めた。デザイン活動によって子どもたちは拡散的思考、異なるアイデアをたくさん生み出す創造的思考を働かせ、臨機応変に活動する力を身に付ける。イギリスでは創造性やデザインの思考に関する議論が盛んなことから、日本との比較研究によって、工作・工芸に関する研究の土台と教育政策と実践に役立てることを目的として、研究を始めることにした。

この研究は質的研究である。工作・工芸はつくる行為が中心となる複雑な活動であることから、統計調査による量的研究はなじまないと考えた。また、イギリスでは小中学校のArt & Design（以降A&Dと表記する）とDesign & Technology（以降D&Tと表記する）を調査対象とし、日本では小学校高学年の図画工作、中学校全学年の美術について2006年を中心に調査した。まず、イギリスのA&Dは日本の美術や図画工作に近いものであり、D&Tは日本の技術・家庭科に近いもので、ものづくりに関



する産業についての知識とスキルが学習内容となっていた。この二つの科目名には、もともと「craft」の言葉が入っていたが、1990年の改革で消えた。また、イギリスの教育で特徴的なものの一つにGCSE（General Certificate of Secondary Education）がある。子どもたちは中等教育修了資格を得るためにこの試験を受験する。そのため学校教育に強い影響力を持っている。このような状況の中で、クラフト教育を取り

戻そうとする新たな動きもあった。Making It Workというクラフトのカリキュラム開発プロジェクトは、1999年にアーツカウンシル・イングランド（Arts Council England）と国際美術デザイン教育学会（National Society for Education in Art and design）によって立ち上げられたもので、クラフト教育の基盤づくりを目的として、地方行政や様々な事業団体とプロジェクトを実施した。そこでは教師らがクラフトに関する知識を深め、指導の向上を目指す機会となった。この活動が強調したのは、クラフトがとても知的なものづくりであるということだった。

次に、研究結果のいくつかについて述べる。各国の文化や歴史、政治の中でクラフトの意味合いには違いがある。この調査から明らかになったことからイギリスの学校でのクラフト、日本の学校での工作・工芸についてまとめる。イギリスの小中学校でのクラフトの実情からは、クラフトがファインアートやデザインの一部と認識されており、小学生の作品を見ても日本の子どもたちのものと比較すると材料や技法もシンプルである。また、独創的なアイデアを生み出すことや実験的姿勢に指導の重点がある。イギリスではつくる（making）とクラフトがほぼ同義語になっており、創造的に考える力が重要視されていた。これらのことから、イギリスの学校でのクラフトを「児童、生徒がオリジナルのアイデアを発想し、素材の扱いやつくり方を探ったり実践したりしながら、ものをデザインし、つくる実践的知識」とまとめた。一方、日本の中学校での工芸の授業では「美しい」という言葉が技術的に

優れたものに対して使用され、材料や道具を上手に使いこなす力の習得が重視されていた。学習指導要領で機能性は工芸の必要不可欠な要素であり、教師も重要な要素と考えてはいるが、実際の授業では機能性に関するものは少なかった。しかし、機能性に関する学習はなくとも、工芸は「日常で使うものをつくる」ということはすべてに共通していた。また、イギリスの調査で多く見かけた現代工芸についての学習はほとんど観察されなかった。これらのことから、日本の中学校における工芸を「生徒が材料道具を使いこなして日常生活で使うものをデザインし、美しく、技術的に上手につくる実践的な知識」とした。次に、日本の小学校の工作は、自己表現と美的目的のためにもものづくりを行う学習であった。イギリスとの違いは、作品を完成させることに重点があることである。授業では材料や道具の使い方を実験的、体験的に探りながら、基本的な扱いの習得に力が注がれていた。このようなことから、工作を「児童が自分のアイデアを生み出し発展させ、材料、道具やプロセスを模索し、それらのコントロールの仕方を学んで、ものをつくる実践的な知識」とした。これらクラフト、工芸、工作に共通しているのは、デザインが中心にあるということである。もちろん熟達した専門知識もそれぞれの形で重視されているが、子どもの考える力を育てる必要性の高まりからも、デザインの思考の要素は現代の工作・工芸教育を理解し、行う上で重要であることが分かった。身体的活動と認知的活動が相互にはたらくことこそ、工作・工芸の重要な教育的意義ではないだろうか。

ここから工作・工芸の教育的意義について少し話をしたい。はじめは「つくる喜び」についてである。日本とイギリスの教師は、子どもたちがつくる喜びを経験することは重要だと考えている。文化人類学者のディザナヤキは、材料を加工して何かをつくる時に感じる喜びは、祖先が行った儀式のための道具づくりに通じ、人間の進歩に大きな力をもたらした、と述べている。作品をつくったり鑑賞したりする喜びを味わうことは、日本の美術教育の重要な目標となっているが、イギリスの教育政策の文献にはこのことについての記述はなかった。考える力に関しては、日本、イギリス両国の教育政策者とともに創造性の育成に注目し、イギリスのD&Tではクラフトの学習を通して、子どもたちの問題解決力や批評的思考力などの高次の思考力を育てるのに効果的であるとしている。特に抽象的思考が苦手な子どもの認知的側面での教育が期待されている。また、身体については、日本とイギリスの教師は工作・工芸に関する学習活動は子どもたちの身体的運動機能を育てるために重要であると考えていた。日本の教師の中には身体的運動機能の強調（工芸技術の習得）に賛成しない者もあったが、日常生活でのさまざまな身体的運動機能を要する場面を考えるならば、これを伸ばす機会は学校で保障すべきではないだろうか。人格形成という視点からは、日本の学校教育の特色として「忍耐強さ」や「すべての過程に責任を持つこと」、「一生懸命に取り組むこと」について学ぶことが期待されている。イギリスの美術教育者ロバートソンは、クラフト教育は「責任の感覚」と「忍耐力」を学ぶ機会を与えるとともに、上手に作り上げた時に本物の満足が得られるとしている。「がんばる」という概念は日本の教育の特徴であり、「一生懸命に課題に取り組んだ」は評価項目となっている。このことは、日本の美術教育から工作・工芸が消えずにそのアイデンティティを維持してきた理由のひとつと言えるだろう。イギリスの調査では必ず聞かれ、日本の教師からは出なかったものとしてキャリア教育がある。イギリスの教育政策者や教師は、子どもが将来、クリエイティブ・インダストリーで働く準備としてクラフト教育が重要であると考えていた。イギリスでは産業界と学校の関連性は強いものがある。また、

現在、私が注目しているのは「家庭生活」における工作・工芸の教育的意義である。日本の小学校では家庭科、中学校では技術・家庭科で家庭生活に必要なスキルについて学習する機会があるが、イギリスの教育政策の中には含まれていない。近年、イギリスで日曜大工を愛好する消費者が増加しているとの調査結果がある。その理由には消費者のコスト削減ではなく、楽しさや自己表現にあるということがわかった。デザインから制作までのすべてに責任を持って行うものづくりは、真の満足感を得ることができる活動ではないだろうか。

ここからは、工作・工芸の学びについて考える。イギリスのクラフトではデザインの思考の育成が強調され、関連教科ではデザインプロセスが視覚化され具体的指導が行われていた。直線的に一方向に進むデザインプロセスモデルは、当時行われていた硬直化したデザイン教育を視覚化し、批判するものであった。これまでより子どもの学習にふさわしい柔軟なデザインプロセスモデルが開発、提示されている。その一つには、課題設定から制作、問題解決、評価などを続けるサイクル・デザインプロセスと呼ばれるものもある。さらにつくる学習が中心の工作・工芸にとって有効なものとして、頭で考えたことと身体を使ってつくる行為との関係を示したモデルがある。

イギリスの授業では、制作のプロセスを記録するスケッチブックが重要であり、スケッチブックによって教師は作品だけでなく、プロセスを大切にすることができる。中学校のA&DとD&Tでは、最終作品とスケッチブックが評価の対象となり、作品展では両方が展示される。また、イギリスの中学校の工作・工芸の授業では個人リサーチが行われ、これらの能力を育てることがカリキュラムに組み込まれていたが、日本の中学校での工芸ではこのようなデザインの思考に関する指導がほとんど観察できなかった。一方、熟達した専門知識の育成は、日本の工作・工芸教育でより強調されていた。日本とイギリスでも教師による工作・工芸技術のデモンストレーションが観察されたが、日本では教師が道具の扱いなどをやって見せる場面がより多くあった。

次に徒弟制的学びについて取り上げる。この言葉にはネガティブなイメージを持つ人が多いと思われる。先行研究によると、この徒弟制的学びのモデルは、「暗黙の学び」、「デモンストレーションとオブザベーション」、「熟達者と初心者の関係」、「時間がかかる学び」、「本物の材料や道具を使うこと」、「特定の文化コミュニティに入る」などが特徴としてあげられる。それぞれの意味についてはここで十分



分に話をすることはできないが、特に重要な点として取り上げるならば、徒弟制的学びのモデルでは、単に活動をまねるだけではなく、その価値観も継承されるということである。特定の文化コミュニティに入るとは、知識を獲得する学習が文化的文脈と切り離せないということである。この徒弟制的学びのモデルを学校で使うには様々な問題もあるが、暗黙の学びなどのような特徴は、教師たちには有効な指導方

法であると理解されていた。

ここからデザインの思考と熟達した専門知識の関係について話したい。この研究の結論は、スキルベースの工作・工芸のカリキュラムで、デザインの思考の指導は可能であるというものである。多くの研究者も言っているように、熟達した専門知識はそれ自体のためにあるのではなく、新しい問題を解決したりより良いものを生み出したりする目的のためにある。本研究では、それを可能とする手立てを提示しているが、ここではその概略のみを示す。一つ目は、デザインの思考と熟達した専門知識の両方をカリキュラムの目的と評価項目に含むこと。二つ目は、小学校から中学校まで継続的にそれらを身につけることができるようにカリキュラムを組むこと。三つ目は、授業計画を立てるときに最適な両方のバランスを考えること。四つ目は、総括的評価ではだけでなく形成的評価を使って、デザインすることとつくることを通しての子どもたち自身の省察をサポートすることである。これらについては、今後、実践的な研究を進めていく。

この調査を通して、両国が互いから学べることが多くあることがわかった。敢えて日本がイギリスから学べることを取り上げるならば、工作・工芸教育の意義を広げること、伝統的なものとアートクラフトのような現代的要素も取り入れること、ものづくりにおける創造的思考やデザインの思考、問題解決力などの育成を重視すること、アーティストインレジデンス (Artist in residence) のような専門家の活用を取り入れることなどが挙げられる。イギリスでクラフトが衰退した理由のひとつは、その言葉をナショナルカリキュラムから無くしたことだといわれている。日本の学習指導要領では表現と鑑賞が明快に存在する。この意味をあらためて考えてみる必要がある。

最後に、工作・工芸は社会文化的文脈の中で継承されてきた活動であるが、学校教育の中で時代からも子どもの生活からも離れてきてはいないだろうか。現代の子どもたちに求められている力は多様であり、学習観は変化してきている。身体的知性と創造的思考を育てる学習として工作・工芸教育について議論が必要なのではないだろうか。

■茂木一司先生コメント

私は、英国留学の恩師が佐藤真帆さんと同じレイチェル・メイスン教授であることから、彼女の博士論文の外部チューターの委嘱を受け、その研究を見守ってきた。最初は、ITC全盛の時代に、工作・工芸を研究するのは珍しいと思った。日本の工作・工芸教育は不安定な状況にあり、「ものをつくる」学習は、技術(家庭)科教育と図画工作、美術教育に分断され、むしろ技術教育寄りになっている。



また、海外留学での優れた美術教育研究がきちんと紹介、受容されず、日本の美術教育の専門理論研究は海外と肩を並べられず、ガラパゴス化していると感じている。工作教育においては、手作りのよさや手のぬくもりを謳うロマン主義的な教育論が多く、認知科学や脳科学など多様な学問的アプローチがなされてこなかった。しかし、ITC全盛の現代であればこそ、佐藤論文が明らかにしようとする「身体的知性」、すなわち「つくる学習」の意味、手の教育の再認識が重要なのである。さらに、佐藤論文は工作教育を文化学習と捉える。世界の美術教育が美術を文化と捉え、ヴィジュアルカルチャー美術教育に方向づけされているという意味でも、佐藤論文は工作教育の現代化をも推し進めていると言ってよい。

佐藤の工作教育には「デザインの思考」と「熟達した専門知識」という2つの論点がある。すなわちそれらはアイデアか技術という二元論を超えるものを意味しているが、それらの越境ポイントとして現代工芸に着目している点は本論文の注目点のひとつである。そこではテクノロジーと手づくりを分けず、むしろ現代のテクノロジーを身体の中に意識することの重要性が提示される。我々（美術教育者）は身体的知性を言葉になりにくいもの、言葉にならない尊いものであるとしてきた。しかしながら、これからはあえて言語化、すなわち理論化していく努力が必要であり、そうでなければ今後の美術教育や工作・工芸教育（の広がり）は期待できない。

創造性の育成を目指す教育は世界的な動向である。またデザインの思考も注目をされている。アートとサイエンスを結ぶ身体技法としてのデザインやデザインの思考が今や重要である。例えばFablabなどでの3Dプリンターの実験的取り組み等を見ていると、ネットワークでつながる人々が織りなすデジタルと手づくりの中間的なものが出現しつつあるように思える。ITCのシミュレーション時代を経て、実物がリアルを実感させ、創造性を刺激するものづくりに回帰するのは必然だろう。

佐藤論文の結論は、日本のスキルベースの工作教育に「デザインの思考」、すなわち「アイデア重視」を導入することである。そして、その方法には様々なやり方や段階がある。論文にある「徒弟制度による教育」は、ヴィゴツキーの最近接発達領域の考え方であるが、このような様々なタイプの学びの可能性を探る必要がある。最後に、ものづくりが技術科に移行していることを、我々美術教育者はもっと真剣に考えるべき時にある。

（この後、協議に入りフロアーからの発言が続いたが、紙面の関係で割愛する。）

記録・文責 大坪圭輔

註：佐藤真帆著「工作・工芸教育におけるデザインの思考と熟達した専門知識の関係 The Relationship between Design thinking and Skilled Knowledge in Craft Education」『教育美術 2013年3月号 No.849』、『同4月号No.850』、『同5月号No.851』、『同6月号No.852』、『同7月号No.853』、『同9月号No.855』掲載

2013年度研究局二大業務の報告

研究局長 山口 喜 雄 (宇都宮教育大学)

本研究局は、日本美術教育研究発表会の企画・運営・総括、『日本美術教育研究論集』の企画・編集・発行という二大業務を行っています。前者の第47回も東京家政大学の結城孝雄運営委員の尽力により同大学板橋キャンパス図書館棟を会場として全役員の連携により、初のモジュール発表(55分間)3組をはじめ計6時間余の全日程を計画通りに実施いたしました。終了後、雨天にもかかわらず会場近隣の洋風レストランで老若男女約40名参加の懇親会で交流を深めました。後者は理論・実践研究、実践研究報告、昨年新設の「研究ノート」を含む研究論集の年度内刊行を予定しています。

1. 発表者史上最多タイ34組44名・100名余参加の2013年度研究発表会

第47回日本美術教育研究発表会は、100余名の参加者を得て10月20日に開催しました。発表者は本研究局史上最多タイ34組のべ44名(史上最多)の応募があり、下記の通り実施されました。今回の発表は「広がり」が特徴です。1) 韓国、佐賀・福岡・愛媛から秋田・福島まで、2) 60歳代から20歳代の学部4年生まで、3) 昨年の2倍・48% 21名の女性を含み、4) 小・中・高・特支・国公私大の現職教員や美術館職員・学部生・院生が、理論・実践研究、実践研究報告・研究ノート等の多様な研究主題で発表を行いました。次回も今年度を上回る参加者と発表の質的向上を祈念いたします。

第47回 日本美術教育研究発表会2013

平成25(2013)年10月20日(日)実施

※タイトルが長い場合はサブタイトル等を省略している場合がありますのでご了承ください。

	発表会場 A	発表会場 B	発表会場 C	発表会場 D
1	〔モジュール発表〕 H・リード御令息のベン・リード先生への面談調査をめぐって 滋賀大学/福島大学/宇都宮大学新 関伸也/ 天形健/ 山口喜雄	〔モジュール発表〕 日本の文化を学ぶ —workshopをデザインする 東京福祉大学/千葉大学/群馬大学 手塚千尋/佐藤真帆/茂木一司	〔モジュール発表〕 造形活動における幼児と親及び社会との共感を基軸とした関係構築の可能性に関する考察 東京造形大学 石賀直之	
2	「フランス教育省の“Historire d es Arts”の普及活動について—デジタル芸術情報の提供と活用— 東京家政大学 結城孝雄	2011年以後求められる美術教員に関する一考察 宇都宮大学大学院生 金子 優人	五感に導くための鑑賞実践の工夫 I 秋田公立美術大学 尾澤 勇	
3	オーストラリアにおける美術教育を通じた異文化理解教育について 東洋家政大学4年 小川 沙弥香	美術教育におけるMoodleをベースにした色彩学習・実験システム 佐賀市立昭栄中学校/中村学園大学 姉川明子 / 姉川正紀	タブレット型コンピュータを活用した高校美術の表現と鑑賞の授業 秋田県立西目高等学校 黒木 健	子どもの絵の世界 松山市立高浜小学校 木村早苗
4	ニューヨークにおける子どもをとりまく環境と日本人学校での美術教育 福岡教育大学大学院生 樋口和美	思考の連続性を促す指導・環境づくりの工夫 愛媛大学教育学部附属小学校 古 謙 幸一	米国における美術館教育の潮流から学ぶ 放送大学 大 高 幸	幼児の粘土素材との関わりについての考察 駒沢女子短期大学非常勤講師 小 口 偉
5	韓国の新しい美術科教育課程—実践を手がかりとして 春川教育大学 柳 芝 英	20世紀後半の美術教育における「創造性」概念の検討 宇都宮大学大学院生 黛 早 織	調査報告：米国の美術館における鑑賞教育の今 東京国立近代美術館/国立西洋美術館 一條 彰子 / 寺島 洋子	色見本提示からの女子学生の連想語 和洋女子大学 島田 由紀子/大神 優子
6	日本の国際協力分野における美術教育—基礎教育への取組— 東京学芸大学附属竹早中学校 山田 猛	西野範夫氏の造形遊び論に関する一考察 宇都宮大学大学院生 多 胡 慎 平	テート美術館「アートへの扉」理論の検討(2) 聖徳大学/さいたま市立植木小学校 奥村高明/ 飛知和 朋子	5歳児クラスの描画研究 鏡を見て自分を描く(自画像はどう変化するか) 東京家政大学 森田浩章
7	須田国太郎と美術教育—戦後期の日本における図画工作科・美術科検定教科書の作成と美術教育の状況に関する考察— 千葉敬愛短期大学 久保木 健 夫	大学生の主体的な学びを育む彫塑教育—省察的ワークシートの活用を通して— 宇都宮大学非常勤講師 三上 慧	図画工作科における表現・鑑賞を一体とする造形活動の理論化の試み—レヴィ=ストロース芸術哲学を援用して— 上智大学大学院生 桐田敬介	図画工作科・美術科で育む空間認識力に関する一考察 埼玉県立越谷西特別支援学校 小 野 恵
8	戦後の美術科教科書における掲載作品の研究(15) —「高齢化」と美術教育に関する考察 宇都宮大学 山口喜雄	保育者の描画観に関する一考察—生活画を中心に— 聖心女子大学大学院(修了) 大 橋 麻 里 子	中学校における美術鑑賞文の指導に関する一考察 筑波大学大学院生 佐 藤 絵 里 子	素材論序説—素材の名の獲得に向けて 東京藝術大学大学院生 水 島 ゆ め
9	LCI「美的教育プログラム」にみる学びの可能性 東洋大学/東京造形大学 北澤 俊之/小林 貴史	日中友好子ども版画展—版画教育の再発見 和光大学非常勤講師 江 渡 英 之	中学校と美術館との連携による鑑賞教育の実践 玉川大学/港区立青山中学校 高橋 愛/森 恵美子	子どもの美的経験における比喩的イメージの活用と課題II 東京学芸大学附属小金井小学校 立 川 泰 史

2. 日本美術教育研究論集について

研究論集編集委員会委員長 小林 貴 史 (東京造形大学)

本年度発行を予定しています日本美術教育研究論集第47号では、昨年の研究発表会にて発表された中から25名の方の論文掲載を予定しています。その内訳は、A群(理論・実践研究論文)が15名、B群(実践研究報告)が6名、そしてC群(研究ノート)が4名となっています。ご投稿された方々には、年末年始のお忙しい日程中、ご協力いただき感謝しております。現在、年度内に皆様のお手元に届くことを目指して編集作業を進めておりますので、どうぞご期待ください。

－ 第一期連続講座終了 －

事業局長 水 島 尚 喜

一昨年より2年間に渡り開催された「公益社団法人日本美術教育連合主催公益事業／連続講座」の第一期が終了いたしました。この講座は「子どもの鑑賞の力をひらく」をテーマとして、「公教育、特に小中学校の教師が自信を持って鑑賞教育ができ、校外施設の美術の専門家と対等な意識を持てるよう支援を行う。そのためのライセンスを法人が発行する。」という内容でした。さらに、公益性を重んじる観点から、受講対象者も小中学校教員以外にも開かれたものとなりました。様々な方面に周知が行なわれ、美術館学芸員、ボランティア、大学院生、塾経営者などの方々の参加がありました。参加者からのフィードバックも大変好評で、どの講座も質の高い学びがなされていました。

結果、延べ200名を越える参加者があり、6名の方が8回の連続講座を満了しました。昨今、教員の多忙化が極まる中で、多くの方々が内発的な学びへの意欲を持ち、教育に携わられていることを実感いたしました。この公益事業が、未来を担う子供たちへと還元されることを願って止みません。さらに次年度以降の事業を巡って、御意見、ご希望を賜れば幸いです。

8回連続講座内容*****

- 1、講師：奥村高明（聖徳大学教授、前文科省教科調査官）
「子どもの鑑賞力とは何か－学習指導要領を読み解く－」
- 2、講師：奥村高明（聖徳大学教授、前文科省教科調査官）
「アート・カードを使った鑑賞活動」
- 3、講師：西村德行（筑波大学附属小学校教諭）
「鑑賞ネタ集① －子どもたちがつくったものから－」
- 4、講師：西村德行（筑波大学附属小学校教諭）
「鑑賞ネタ集② －作家作品を使った活動－」
- 5、講師：水島尚喜（聖心女子大学教授）
「子どもにとって美とは何か －センス・オブ・ワンダーをめぐって－」
- 6、講師：榎原弘二郎（埼玉大学名誉教授）
「見る力を生きる力として」
- 7、講師：藤崎典子（渋谷区立加計塚小学校教諭）
「海外での鑑賞教育の事例」
- 8、講師：橋本光明（長野県信濃美術館・東山魁夷館館長、信州大学名誉教授）
「学校と美術館をどのように繋ぐか」



大盛況の講座風景 ー奥村高明運営委員によるー
武蔵野美術大学 新宿サテライト（2013年8月26日）

役員 の 改 選 に つ い て

平成26・27年度役員改選

選挙管理委員会 委員長 郡 司 明 子

公益社団法人 日本美術教育連合 定款25条により役員の任期満了にともなう選挙は、理事会により選出された選挙管理委員長 郡司明子により、平成25年11月25日現在の有権者に同年同月26日に投票用紙を送付し、同年12月16日当日消印有効を締め切りとし、同月21日日本美術教育連合事務所に於いて開票作業を行った。開票作業は藤崎典子氏、依頼した一般会員の方が当日都合で欠席のため、西村德行氏にお願いした。オブザーバーとして宮坂元裕理事長が参加した。郡司が投票用紙を読み上げ藤崎氏、補助として西村氏、宮坂氏がカウントし、3名のカウント数が一致したので、全ての資料を封入封印して終了した。

平成26年1月26日理事会、運営委員会合同委員会の席上開封し、有効投票、無効投票の確認ののち得票数の修正を行った。最後に実名と票数を合わせ、当選を決定した。

有権者数 188名、 投票総数 83票、 無効投票数 2票、 有効投票数 81票

その結果以下のようになった。

理事の候補 宮坂元裕46票、水島尚喜44票、山口喜雄44票、大坪圭輔40票、郡司明子38票

以上は平成26年4月20日（日）開催される通常総会に於いて決定される。

事務局便り

公益社団法人 日本美術教育連合 発行 日本美術教育研究論集 第47号

2014年3月末日 発行します！

公益社団法人日本美術教育連合では、毎年「日本美術教育研究発表会」を、文部科学省の後援を得て開催しております。この発表会で提案・報告された美術・造形教育に関わる研究・実践の数々が1冊の研究論集となり会員の皆様および関係諸機関に届けられます。それが『日本美術教育研究論集』です。多角的・先進的な研究、日頃の実践に裏打ちされた貴重な報告などが1冊にまとめられた内容の濃い論集です。

本年度も昨年度に引き続き、年度末（2014年3月末日）に発行する運びとなりました。

どうぞ御期待ください！



デザインは若干変更される場合があります。

■平成25年度（2013年度）会費納入、ご協力ありがとうございます

昨年10月の「第47回日本美術教育研究発表会」、本連合主催の造形・美術教育力養成講座、11月に武蔵野美術大学新宿サテライトでおこなわれた造形美術教育フォーラム等の開催により、それぞれ大きな成果をあげることができました。

本年度も、会員皆様のご理解とご協力を多く受けることができ、会費の納入状況が改善されました。しかしながら、まだ納入いただけていない会員もいらっしゃいます。是非、ご入金の協力をお願いします。尚、3年連続会費未納入の会員は「退会」という対応をいたします。

何卒、ご理解とご協力を引き続きお願い申し上げます。

未納の方は！

平成25年度会費 **6,000円** を納入してください。
日本美術教育連合 郵便振替 00170-1-86036
*納入期限：平成26年3月21日（金）（本年度会計を閉めます）

■お問い合わせ先：事務局 筑波大学附属小学校図画工作科研究部 西村 徳行
〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 筑波大学附属小学校
TEL+FAX 03-3946-1962（直通）
E-mail tnishimura@elementary-s.tsukuba.ac.jp

■平成26年度 定時総会 予告■

巻頭ページでもご案内いたしましたように、第4回定時総会を平成26年4月20日（日）に開催いたします。多数ご出席いただきますよう、宜しくお願いいたします。

■日 時 平成26年4月20日（日） 13：30～

■場 所 聖心女子大学 400番教室

東京都渋谷区広尾4-3-1（東京メトロ日比谷線広尾駅より徒歩5分）